

明治150年記念 後世に伝えたい山口県ゆかりの人物等研究支援事業
審査委員会委員長三宅紹宣広島大学名誉教授による講評

本研究は、広沢真臣の政治動向と思想について、「攘夷」に対する認識、長州復権問題に対する認識、薩長同盟・王政復古に対する認識を明らかにしようとしたものである。従来、広沢の本格的研究は行われておらず、その状況を克服すべく意欲的に取り組んだことは高く評価できる。一方で、広沢が「討幕」を志向していたのではないという指摘は、慶応三年の政治過程について、どこが幹でどこが枝かの峻別が不十分なため生じている。また、薩摩藩は「討幕」を目指していたのではなかったとする学説に依拠して論を組み立てているため、王政復古政変にいたる政治過程を無理に解釈しようとする傾向が見られる。今後は、史料に即して正確に把握できるような研究に発展することを期待したい。さらに、藩庁文書の中には、無署名であっても広沢直筆のものが多数含まれており、それらの活用も今後の課題といえよう。